

スロイド教育について

オットー・サロモン著
横山悦生訳

「公的な教育はわれわれの時代の人生の最も重要事である」

フィヒテのこの言葉は、ある特定の時期だけでなく、あらゆる時代、あらゆる状況において有効性をもつという意味において、よく使われている言葉と考えられる。

人はしばしば大きな問題について語る。しかし、その際にそれが税制や軍隊組織の分野での改革をさすことは奇妙である。その議論の余地のない重要性は多かれ少なかれ一時的な問題である。

一つの問題だけがその概念の最も厳密な意味において大きな問題と呼ぶことができ、一時的でなくすべての時代において人生の重要な問題であると言うことができる。それは教育（*uppföstran*）に関する問題である。恐らくより正確に言うならば、現象を引き起こす諸原因とそれらの相互の関係においてより深くその現象をみることを希望するならば、それらの現象が宗教的、社会的な分野あるいは政治的な分野に関係している場合でも、それぞれの社会現象が本来の意味において最終的には教育問題となる、あるいは教育問題を通してその解答を得ることを見出す。それはなぜなのか？未来が若者に属するのは至極当然で、教育を通して生み出された、それぞれの発達はいつか具体化し、次世代の思考方法・行動力・やりかたにその色合いを残す。教師つまり職業としての教育者は、その活動の重要性について同じような見解を抱いているのは不思議ではない。それは一人一人の教師がまず自分の行為をできるだけ高く評価したいからである。しかし、この見解は誰でも容易に納得できるものとして確かに学校に勤務している人たちだけに属するものではない。実践的な分野においてさえ教育制度がどのようにますます重要になってきたことを、国の指導者層が現代社会における学校の重要性について十分に理解していることを現代史は明確に示している。彼らは教育制度を支配でき、自分自身の見解を表現させることができる政党がある程度未来を決定できることを知っている。指導者層は将来の世代の意見がつくられるのはおそらく団体や会合ではなく、学校であることを知っている。カトリックの反動体制下でのベルギーやオーストリア、ラディカルで自由な思考の旗のもとでのフランスで教育問題が公的生活（市民としての生活）においていかに重要な要素であるとみなされるべきかを十分に明確に示している。

現代では学校の分野において多くのことが起こっている。受身的な関心しか持っていない人でもそのような問題に目を向ければ、すべての教育制度は一公立であれ、私立であれ—いわばある種の発酵状態にあることに気づかざるをえない。まったく異なる側から現在あるものに対して攻撃し、新しい任務が学校に課せられる。新しい、または新しいとみなされる方法が要求される。ある人はカリキュラムからあれこれの教科を取り除くことを望む。別の人はそこに新しい教科を導入することを望む。ある点で、すなわち何かをなすべき、あるいは何かがなされねばならないということについてののみかなり一致していると思われる。すなわち学校が高等教育でも初等教育でも袋小路に入らないように、あるいはもう少し穏やかな表現をするならば、若者と若者を通して学校の目的のために必要としている時間と努力により社会が十分な利益を得るようにしなければならない。

少なくとも一般の注目を得ることのできたこれらの問題の一つはスロイドであり、つまり学校活動における肉体労働である。ますます注目を集めている教育問題であるスロイドを教育学の分野の他の現象と関連しないと考えるならば、それは大きな誤りである。あえて表現するならば、その独自性、物質的な性質、少なくともある観点から見たときに具体的に示すことのできる結果のおかげで、スロイドは他の現存の教科あるいは提案されている教科よりも学校の外にいる人々からの変わらない注目や比較的長く続く関心を獲得している。これがスロイドを取り巻く状況であるが、それゆえ教育学な観点からこのスロイド教育運動が教育的な意味を持たねばならず、他の意味を与えることに対して確実に警戒しなくてはならない。すなわち、いろいろな国におけるスロイド教育運動の具体的様相はそれが一般的な教育改革の一つの面にほかならないことを確認している。それゆえ、それとは異なる扱い方で扱われてはならない。このことを主張することは争う余地がないほど重要であり、そうでなければすでにしばしば起こったように、次のことが容易に起こる。つまり問題の重点がねじ曲げられ、そのようにして学校の活動のためのスロイドでなく、スロイドの活動のための学校になってしまう。

これらの二つの異なる意見を現在のスロイド教育運動と同じ方向に進んでいる、あるいはよく似た努力をしていると決して見なしてはいけないことは強調されるべきことである。すなわち、スロイド教育運動は二つのまったく異なる運動に別れるが、表面的な観察者がこの二つの運動を混同するのは決して稀ではないが、実際には両者は名前にしか共通点がない。その一つはフース・スロイド (husslöjd) が次第に衰退し、特に農村部の住民がその生産物を自分の家で利用したり、また一部は直接販売する目的で家庭内労働に適した特定の種類のスロイドを学ぶ措置をとることから出発するという点で、国内経済を強化する立場である。この方向はスロイドの能力を普及させる手段として学校をとらえる。教育施設としての学校の一般的で本来の目的は後景に退き、家庭に必要なものを作る、あるいは販売に適した特定の種類のスロイドをつくる技能を生徒に習得させるという要求に道を譲る。作品を選択する際に教育的な観点とは全く異なる観点が基準になる。そのようなものとしての作品の種類は、あるいは利用される教育方法は、子どもの発達に役立つものであるかどうかということが考慮されてはいない、あるいは考慮できない。作られるものが主要な目的であり、作業する人それ自体は副次的なものである。その稼ぎはフース・スロイドやヘムスロイド (hemslöjd) の助けになり、そのための最も活動的な手段である学校はそれ自身の任務から引き離され、注目すべき目的かもしれないが、あらゆる点で異なる目的に引き込まれる。

スロイドを学校の活動に役立たせるような、もう一つの方向は以上のものとはまったく異なっている。すなわち、教育学的な基礎にもとづいて組織された肉体労働は、多くの点で子どもの発達に強力に作用する手段である。その方向はスロイドそのものの促進のためではなく、学校がスロイド教科を通してできるだけ全面的な生徒の発達に作用するという学校の任務をより完全な方法で遂行することができるためにスロイドを学校に導入するのである。この理解によれば、完成した作品ではなく、労働することそれ自体が最も重要な問題である。授業で作られたものが高い販売価値を持っているかどうか、子どもが将来同じ作業を遂行するかどうか、学校で生徒が取り組んだスロイドの種類がヘムスロイドにとってあるいは職業教育にとって最も適切であるかどうかは、これらの観点は本質的ではなく、決定的になってはならない。教育の組織に際して、例えば教科書の選択の際に学校を卒業してから利用可能性を考慮するわけではないとか、あるいは教室から黒板や線を引いたノートや見本や壁に掛けた板や他の同様な教材を子どもがそれらを将来使わない可能性が高いという理由で教室から捨てることがないのと同じである。スロイドの種類とその学習の方法はここでは単なる手段であり、そのようなものとして見なさなければならない。それらは学校において一定の教育目的に役立つ限り正当性をもつ。教育目的の達成のために学校はそれらを利用する。それゆえ、それらが提供する教育的価値はそれら进行评估する際の基準を形成する。

スロイドの学校への導入に反対する抵抗の大部分は—それは恐らくわが国では他国のものより小さいが一疑いなくスロイド以外の教科の教師による、目的と手段においてまったく異なる二つの運動のややわかりやすい混同にその基礎がある。学校自身の大きな任務が提起する多くの重要な要求をほとんど満たすことができないという困難さを十分に自覚している多くの教師は、この混同によってスロイド教育が必然的に学校の活動をゆがめ、学校を教育目的から異なる道に導くと考えている。この教師たちは、このようなことに貢献したくないとか、フース・スロイドあるいはヘムスロイドの長所を尊重しつつもそれにどんなに注目すべき価値があるとしても、学校に固有な崇高な目的を捨てて異なる目的に学校を向けさせることに躊躇するのは当然のことである。スロイド教育問題について学校の後見人たち（教師と教育行政）の拒絶や消極性はその大部分はそれの実際の意味に対する誤解によっている。

スロイドが学校の活動に入ってきた時、どのような教育的な意義がスロイドにあり、どのような目的をスロイドにもたせねばならないのか？その答えは回答する人がもつそれぞれの教育学的な考え方によって当然異なったものになる。ヘルバルト主義者たちは、称賛に値する活発さと明白な闘志を通して数において不足しているものを補うように全力を尽くし、また生徒に実物教材の製作に取り組ませようとする。彼らの観点からみれば、理論的な教育のサポートのために集中する手段を作ることが手工の第一の目的となる。フレーベルの教育学の支持者たちはフレーベルの教義から引き出された結果を幼稚園における手工の方法に適用しようとし、この手工の活動のあるべき学校における躰と授業のあるべき基礎としておこうとしている。基礎的な教育施設と専門的な教育施設の違いを明確に理解していないように思われる他の人々は、民衆学校でスロイド教育を特に一種の準備的な専門教育としての形態をとらせたがり、できるだけ多くの職業の代表的なものを教えようとする。また問題の核心により近づくようにアプローチしていった多くの学校関係者は、教育学的な基礎にもとづいて組織されたスロイドの中に重要な意義をもつ力の発達させる教育手段を見る。彼らは、正しく組織さ

れ指導された肉体労働が子どもたちに学校にとってだけでなく、何よりも人生にとって本当の価値のある面を目覚めさせ、定着させようことを知っており、認めている。彼らがスロイドを通して実現したいことは、つまり形式陶冶 (formell bildning) である。この表現はスロイド教育の概念を一面的にしか理解していない人の耳には雑音以外の何ものでもないであろう。また彼らはスロイドが遅かれ早かれ子どもの力の発達的手段として、学校のカリキュラムの中に正当な場所を獲得するということになることになりにかなり確信をもっている。教育の目的は、疑いもなく可能な限りの全面的な発達を実現しようとするのである。理論教科と実習教科の教育的価値は、その他の教科との関連において、その教科が全面的な発達に貢献しう程度による。教育者が考慮に入れなければならないところの子どもの性質や力の多面性の結果、どの教科もそれだけですべての形式陶冶の面を利用できないので、さまざまな教育手段の選択の際に理論教科と実習教科が相互に補完するように、すべての教科が一つの統一体を形成するように組織することが追求されなければならない。また、新しい教科が学校に同様の教育手段 (bildningsmedel) として導入される時、この新しい教科が子どもの発達のどのような側面を促すことができるのか、あるいは促すべきか、さらにこれを通してより完全な教育の結果を期待することができるのかどうかを検討する必要がある。もし、提案された教科がこの点で不必要であるならば、これらの子どもの発達の側面は以前に十分に考慮されていることは明らかである。そうでない場合は、いろいろな教育者が言うところの調和的な教育 (bildning) が意図される限り、単なる意味のないスローガンでなければ提案された教科は他の教科の間に配置されなければならない。特に学校への製図や体操の導入についての歴史はこの点で多くのことを語っている。

教育手段としてスロイドが持っている価値は比較的にかなり多面的である。スロイドが子どもにもたらすところの、有用な活動において手を使う技能以外に、他の点でも人生のために役立ついろいろな力や性質を発達させることに注目すべき方法で貢献することができるだろう。これらの中に労働への愛とそれによる勤勉と持続性が指摘されてきた。自己活動、正確さ、注意深さはスロイドを行っている間に要求され、発達させられるところのもう一つの性質である。それとともにスロイドが製図と同様に、おそらく製図以上に眼を鍛え、形態感覚を育てることは自明のことである。最後にスロイド教育の重要な目的として、肉体労働に対する尊敬の念を育てること、学校がスロイドを通して以前よりもよりよく、必要な身体教育を提供することがあげられる。この身体教育のことについて以下にもう少し述べる。

肉体労働への尊敬

確かに現代では、理論的には肉体労働に対する尊敬、その遂行者である労働者に対する尊敬を抱かない人はいない。ついでに労働者について言えば、個々の労働者のことではなく、社会階級の擬人化としての労働者のことである。社会階級としての労働者は、組合制度によって一定の重要性を獲得し始めた。それゆえ社会階級としての労働者が考慮されなければならない。労働者に対する尊敬は実際にはどうなのであろうか？教養のある階級の中でどのくらいの数の父親が自分の息子に手工業の職人や他の肉体労働に就くことを認めるであろうか？肉体労働者の中でさえ、自分の子どもを何かより良いものにならせたい、労働者階級とは異なる階級に移動させたいという熱望がないだろうか？この点で他の理論的な教育を受けた職業が一般的に手工業の職人や熟練した工場労働者が得る金銭的な利益よりも大きい利益をもたらすことを非難することはできない。そのことは常にそうではないからである。逆にそれと全く反対のこと、すなわち自らの学習に多くの時間と多くのお金を犠牲にした人が被害を被った経験を多くの人がもつことがしばしば起こりうる。いや、その原因は肉体労働が自由な市民にとって価値のない仕事として見なされた時代から受け継がれた、生命力の強靱な偏見が依然として存在していることである。それによれば、肉体労働はより低いものとみなされ、それゆえ他の種類の活動よりも尊敬されない。スウェーデンの教育施設は、初等レベルのものであれ、高等レベルのものであれ、多くの点でとても有害な偏見に反対するために多くのことをしてこなかった。いや、むしろその考え方を固定することに貢献してきたであろう。学校は、理論的な知識を詰め込むことにもっぱら狙いをおき、肉体労働との関わりをさけることによって、世代から世代へと生徒たちに肉体労働はそれ自体従属的な価値しかもたないという確信を植えつけ、根付かせてきた。それゆえ、これらの生徒たちは、彼らが幸福になるような推奨された「教育」がその一般的な意味での肉体労働からの解放とかなり関連しているという観念をもってその後人生を歩んでいく。確かに学校が自らの良心の呵責に基づいて、その怠慢を直そうとしても遅すぎると考えなければならない。それまで成長期に教えられた間違った理解を通して、肉体労働に関してあまりに多くの人生を失ってきた。生徒たちにそうした存在の理解をかなり失わせた学校を非難する正当な理由がある。恐らく優れた技能の職人や進取的な農業従事者になったかもしれない多くの若者が学校による理論的な職業への一面的な嗜好によ

って、その若者にふさわしくない道に誘導された。そのことによってその人自身や社会全体に害をもたらした。社会問題が圧倒的に注目され、その解決を要求し、ある社会階級が他の社会階級に対して闘いを煽る現代において、将来の世論が準備される学校が言葉だけでなく行為によっても、頭脳労働であろうが手の労働であろうが、すべての高潔な労働の道徳的価値を教えることはとても重要である。真実はルソーの以下の言葉にある。「子どもは言うことや言われたことをすぐ忘れるが、子どもに対して行われることや行われた行為は容易には忘れない」。

教育 (uppfostran) におけるスロイドについてのもう一つの要素は、肉体的な発達にとってのスロイドの価値である。それは、スロイドが正しく組織されるならば、学校の椅子や家庭で宿題で長い時間座り続けることに対する必要な対策となる。それは肉体の力を強化することに直接的に貢献することができる。中等学校委員会の答申の参考資料においてケイ教授は、成長期に極端に長い時間座っていることで生じていると考えられる病気について、その資料の 75 ページにおいて対策の必要性をかなり詳細に以下のように発言している。

「学校教育に公正な責任を果たすことに必要な範囲を超えて、子どもに毎日不必要に座らせないことや、学校が要求している子どもを長い時間座らせるという避けられない、不健康な影響に対してできるだけ体の運動をさせるという対策が学校の最大の配慮の対象にされなければならない。現在中等学校では一日おきに一回半時間の体操がおこなわれているが、それは体操が可能にすることをしてはいるが、健康の必要を満たすことから程遠い。」

学校が身体教育、身体健康の促進に適切な考慮を払うという義務を明瞭に認識すると、学校は体操や自由な遊びと並んで肉体活動に、健康の促進の点でとても重要な価値を示す一つの手段を見出すであろう。

学校のスロイド教育の教育目的 (pedagogiska syfte) についての以上の示唆をふまえると、スロイド教育がその目的の実現するためにどのような基礎に従って、どのような方法で組織されるべきかが次の課題になる。きちんと計画しないと、手さぐりで探すことに対して言い訳をし、疑わしいテーゼである「すべての道はローマに通じる」ということで自分を慰めるような人以外には、決められた目標を達成することはどんな分野であってもこの目的をもった完全に系統的な手順を常に前提としている。実際に歴史の発達の教授が試験のための勉強とはまったく別の方法で行われるのと同様に、どんな方法でも子どもがただスロイドに従事すれば教育の目的 (uppfostringssyfte) の達成に十分である、肉体労働は疑いもなく促進されると考えるならば、それは大きな誤りであろう。しかし、これは必ずしも自明ではない。それ練習の際に少数の道具と操作だけがともなうようなスロイドによって一般的な技能を獲得することはほとんどない。子どもは労働への愛を得ることはない、わずかな変化しか提供しない、それゆえ最終的に機械的な方法で遂行されるような仕事によっては注意深さと勤勉さに慣れることはない。教師が授業の際に子どもの作業に教師自身が手を加えるならば、子どもの自己活動の発達はしない。残念ながら教師が作業の最も重要なところを完成させることは珍しいことではない。子どもの観点で正確に遂行できない制作物やまたはいくつかの加減に作られたものを教師の側から安易に認めることを通して、子どもたちを正確に慣れさせることはできない。少なくともそれによって眼を練習することができない、直線の模様でしか形態感覚を発達されることができない。もし何よりもまず完成された飾り物を作らせるならば、実際の肉体労働に対する尊敬を子どもに育てることはできない。逆に肉体労働に対する高慢さが固定されてしまう。表面的な観察者の眼に美しくないものであれば、肉体労働が単純で、価値の低いものとみなされる。最後に、座り続けることは肉体的健康を促さず、スロイド教育という魅力的な看板の下で毎週さらに何時間も椅子に座らせることを通して、成長期において過剰に座り続けることに対する反作用が子どもに起こりうる。その授業がスロイドであれ、あるいは他の教科であれ、その望まれる目的への到達の為に取られた措置が一つまたはいくつかの目的と一定の関係になければならない。

スロイド教育の組織の際におそらく最初に考慮しなければならないのは、スロイドが同時に複数の種類のスロイドを含まなければならないのか、あるいは意図している子どもの発達が一つの種類のスロイドのみで到達できるのかどうかである。この後者が可能な場合は、一つの種類のスロイド教育に集中することに賛成している。一つは各々のスロイドの種類がそれぞれ独立した教科としてみなされるべきであることを無視してはならない。作成されたカリキュラムには一般的に教科の不足がないので、カリキュラムに多くの教科を加えることを何か特別に望ましいものとしてみなすことはできない。さらに学校が多くの教科の学習によって悩むだけでなく、多くのスロイドによって悩むことも何か特別に望ましいものとしてみなすことはできない。

さらにこれに次のことが加わる。スロイド教育にあてることができるのは常に比較的少ない時間数であり、その時間を分割することはできない。多くのスロイドの種類を利用するためには一つの種類のスロイドが教育

の対象である場合よりも多くの教師力と高価な設備が要求される。学校におけるスロイドのあり方を決定する際にこれまで述べてきたことが実践的な理由になって、一つの種類のスロイドに決定することになる。実際に多くの種類のスロイドを利用することによる発達と同じ発達が一つの種類のスロイドを通して実現することを強調することは特に重要である。

多くの選択肢がある場合、一面性に陥るという理由で、この一面性は無条件に誤りであるという理由で、一つの種類の作業にもっぱら集中することに反対することは可能である。われわれ人間が実現できることは相対的によいものだけであり、それゆえ常に多かれ少なかれ誤りを伴うことは避けられない。また、確かに学校の分野において過去に存在した方法、現在続いている方法、将来考えられる方法について、ある観点から見ると欠陥が多いと烙印を押すことができる。毎日少ない授業時間をもつことは誤りである。それは結果に達するのに時間が足りないからである。逆に多すぎる授業時間をもつこともまた誤りである。それによって過度の疲労を生み出すからである。同じようなことが短かったり長かったりする宿題についても言える。子どもを少ない教科に取り組ませるのは間違っている。それによって知識の分野が制限されるからである。多くの教科をもつこともまた間違っている。それによってそれぞれの教科を少しづつ味見するだけになってしまう。長い休暇は多くの時間を奪い、休暇が短ければ学期の疲労の後、十分な休息をもたらさない。クラス担任の教師を使うのは間違っている。一人の人間がしばしば異なる種類の教科を教えるのにふさわしい技能を身につけることは不可能であるからである。しかし、専科教師のシステムは教育の観点から次のような諺が当てはまる。「コックが多ければ多いほどスープが不味くなる」。家庭でのしつけと教育の義務を親が遂行するのをかなり妨げると言う理由で学校自体は必要ないと言われている。もし学校をなくし、あらゆる介入から両親を自由にし、両親に「彼らの最も大事な権利」の遂行を委ねるならば、そのようなことから生じてくる状況が現在の状況よりも批判に値するのではないだろうか。つまり出発点に戻るならば、先に述べた意味での一面性は実際には誤りであれば、その反対つまり多面性も同じ程度誤りである。この場合も他の方法と同様に、それに対する何の批判もされないような、それに向けられる否定の言葉もないような完全な方法ではなく、むしろ理由のある反対が最も少ないような相対的にベストな方法を選ぶべきである。

ところで多くの種類のスロイドを同時に利用することはある段階でたくさんの種類の教科書を同じ教科において同時に使うようなものである。両方のもの、つまりスロイドの種類も教科書も単なる教育手段に過ぎず、教育目的ではない。スロイドの種類は子どもにある発達を生じさせとための一つの手段である。教科書もある知識を子どもに教え定着させるための一つの手段である。一面性が誤りであり、なおその反対である多面性が役に立つものであるならば、教師がこの一面性を避けるために、いくつかの教科書をいやむしろ多く教科書をあらゆる教科で利用することは適切であるとみなされるだろう。それによって生徒は様々な著者の教科に対する見解に詳しくなり、それぞれの教科に対する考え方に接するだろう。しかし、今でも鮮明に思い出すのは同じ教科で二つの教科書（新旧の教義問答書）を使用することによって、信じられないほどの混乱と戸惑いを引き起こしたことである。一般的に生徒は多面性についての疑わしい実験をし、多面性を賞賛するより平静さをもって一面性への非難に耐えることを何回も試みるだろう。

しかし、残念ながらしばしば事実がそうであるように、スロイド教育についてできるだけ一種類のスロイドに集中するという願いを誤解してはいけない。つまり、他のすべての種類のスロイドを排除して学校でのスロイドの時間を一つの種類のスロイドだけに従事させるという意味ではない。すなわち、年齢の異なるすべての子どもを発達させる手段として、十分に適切であるような一つの種類のスロイドを研究することは意味がないという理由で、学校でのスロイドの時間を一つの種類のスロイドに従事させることは合理的ではない。というのは、例えば 6 歳の子どもは高学年の子どもに対してはるかに力が及ばないからである。それゆえ、ある段階に適切なことは、他の段階にはあまりにもやさしすぎたり、難しすぎたりする。それゆえ、木工スロイドが学校の目的にとって最も適切なスロイドの種類であると話すとき、つまりそれだけが使われるべきであると話すとき、もちろん一定の年齢の範囲の中で、およそ 11 歳からの年齢の段階において木工スロイドがなされると理解されるべきである。

しかし、この年齢の段階も常にかなり曖昧であるという点も無視してはならない。というのは特に体力という点に関して、子どもの発達状態はかなり異なっている。田舎で育てられた子どもは、概して都会で育った同年齢の子どもよりも体力があり、ほとんどの場合男子は女子よりも強い。それとともにいろいろな点で常に個人差がある。

木工スロイド (traslojd) については、頻繁に現れるところの木工スロイドやその一部である指物スロイド

(snickerislojd) を職業的に行われる指物 (snickeriet) と混同するという誤解に注意することも重要である。このかなり本質的に異なった2つの種類の作業の混同の結果、しばしば次のような意見を耳にすることがある。「すべての子どもが指物師になるわけではないので、指物以外の手工も民衆学校で教えるべきである」とか、「当然民衆学校の教師よりも、その職業を自分で学んだ指物師がその職業をよく教えることができるに違いない」とか、「数週間をかけて教師が手工職人になれるなら、同じ時間をかけて有能な手工職人を教師にすることができるはずだ」等々。多くの実践的な問題を引き起こした、このような概念の混乱は誰にでも説明できるが、より詳細に見れば混乱する必要はない。木工スロイドという言葉は、より一般的な意味では指物スロイド、木工旋盤、彫刻を含んでいる。特に指物スロイドに関して、指物スロイドと指物師とは部分的に同じかあるいは似たような道具で木という材料を加工する以外にほとんど共通点がない。それに対して多くの重要な点で両者は異なる。職業的に行われる指物の分野では家具とかドアとか窓枠とかインテリア一般等々の比較的大きなものを製造することに従事するのに対して、指物スロイドの分野ではより小さなもの、家庭で使う小物や農作業の道具あるいはその部品、熊手の柄、ペン軸、スプーン、キーホルダーのような多くのものが工作人 (slojdare) により作られる。しかし、職業としての指物師によって作られるのではない。少なくとも彼は仕事としては作らない。指物スロイドでは、よく知られているようにナイフが最も重要でよく使われる道具である。ナイフを持っていない工作人はまるで馬を持たない騎士に近い。しかし、職人としての指物の世界ではナイフは道具としてまったく使わず、普通はナイフを使う練習をほとんどしない。例えば鉛筆の先端をとがらせるとき、ほとんどの場合鑿 (のみ) を使う。彫刻刀や引き削りかんな (bandkniv) のような道具でさえも木工スロイドで使われるが、指物師のところでは使われない。さらにスロイドと職業との間の本質的な違いは以下の点にある。職業としての生産では場合によっては分業が行われるが、それに対して、工作人は作業を最初から最後まで自分の手で行なう。個々の職人はしばしば作業場で完成させたものの小さな部分だけにしか満足しないが、それに対して工作人は自分自身の仕事の成果を誇りをもって示すことができる。前者は、生産者としてはその分子としてだけみなされ、その分母は共同作業者の数によるが、後者は一人で全体を作るところの個人の仕事である。

スロイドの種類の比較をする際に、この年齢範囲の子どもに最も適切な発達的手段として木工スロイドが最も良いと判断を下す理由はたくさんある。木工スロイド、あるいは少なくともそこに含まれる指物や旋盤細工は、経験が明白に示しているように作業者の関心をかなり獲得することができる。その結果、スロイド教育が学校で必修でないところでさえ、特別な事情がある場合以外は生徒は出席する。この種のスロイドを通して、生徒たちは初心者であっても十分に利用できるものを作ることができる。多面的に有用な、いろいろな目的にあった作品がこの分野では作れるからである。さらにこれらの作業を秩序正しく正確に清潔な状態で綺麗に行うならば、これらの性質を生徒にかなり発達させることができる。木工スロイドについてのモデルの選択の際に形態感覚の形成もまた考慮に入れることができると同様に、美的教育に対応する基本的な観点のためのあらゆる前提が木工スロイドには含まれている。いろいろな難易度の多くの練習を含んだ木工スロイドは、一般的に作業者の能力と体力にも相応しい。体力については、指物スロイドがずっと座ったままの状態に対する平衡を保つための優れた手段を特に提供しているとともに、きちんとした方法で組織された指物スロイドは体操や自由な遊びと同様に身体の強化と体力を徐々に発達させることに貢献する。この点で特に強調しなくてはならないことは、教師が指物スロイドにおいて生徒に主要な道具を両手で交代に持ち方を変えるようにさせ、それを通して両方の手で作業をすることに慣れさせることではなくて、体操やフェンシングの場合と同様に作業によって左右の筋肉を同じように発達させることである。この点で確実に一面性が取り除かれるべきである。

先のメリットに加えて、教科としての木工スロイドの重要なメリットは、それが方法的な組織化にとっても適していることである。したがって必要な調査と準備作業がなされた後、そこに含まれる練習がより簡単なものからより難しいものへ、より単純なものからより複雑なものへと徐々に向上していくような一連の木工スロイドのモデルシリーズが定められる。この点における関連性は疑いもなく最大の意義を持つ。というのは、それが法則に従い、教授法が一般に有効なものとして認められる時に初めて、このスロイドの種類が成果をもって学校の仕事に役立ち、学校の目的に利用されるからである。最後に忘れてはならないことは、木工スロイドは多くの道具を要求し、さまざまな手の操作の機会を与え、そのことにより他の種類のスロイドと比較すると作業者に少なくともより一般的な手の技能をもたらすことである。この種類のスロイドは多くの道具と手の操作を要求する。これが大きくなればなるほど、木工スロイドが手の教育を生み出す。手の教育の観点から見て、もしある作業の遂行の際に生徒にできるだけ多くの道具と手の操作を使わせることが有益であるのは全く当然

のことである。教育学的な目的で行われているスロイド教育に対していわゆる実践的人間 (praktiska person) からしばしば投げかけられる批判, つまりあれこれのものを多くの道具を使用せずにより早くより簡単に製造できるのではないかという批判はそれゆえほとんどの場合意味がない。その批判は, 体操の教師に対する以下に述べる非難と比較対照することができる。体操の教師がある練習の際に紐を越える跳躍を生徒に要求するが, 生徒はこうした障害なしに自分のやりからをを進めていくことが可能なはずである。このようなあるいは類いの批判は, その批判者が教育的な観点とは異なる観点からスロイドを見ていることを示している。それとともに生徒がその仕事が完成した時に得られる発達そのものよりも, 為された仕事と販売される価値が優先される。

木工スロイドについては, 木工スロイド自体に指物スロイドや彫刻や旋盤による加工が含まれることをすでに述べた。しかし, より詳細に調べれば, 最初にあげたものすなわち指物スロイドが実は教育手段として十分に役に立つ肉体労働への示唆された要求を完全に満たすことがわかる。

旋盤加工も彫刻もそれ自体, 教育手段として役立つ肉体労働を必然的に要求することに対応していない。多くのスロイド教育に好意的な人々は, スロイドが教育手段としての肉体労働である必要性を見落とし, 彫刻に与えられてはならない場所を与えてしまうことがよくある。このような状況が特にドイツの学校にはある。さらにわが国においてさえ同じ方向で声があちこちであげられてきた。ここで短くその主な理由について答えておくことはおかしくないだろう。彼らは一致して学校におけるスロイドに関して, 彫刻が一つの教科として有用であることを主張する傾向がある。

この理由の一つは, 彫刻が美的教育にとって特に大きな意義があるとみなされるべきとし, それゆえ彼らがこの明らかな欠点を無視しながら, 彫刻を熱心に練習すべきだとする。この見解についてそれは正しくもあり, 間違いでもあるといえる。彫刻は確かに美的感覚の教育にとって疑いなく重要であるものの, この(発達)段階ではそのことが重要であるということにはならない。こうした結論は, 例えばある人が数学的概念の発達にとっての関数理論が重要であるので, 関数理論の習得が算数や幾何学の授業の前に学校で行わねばならないということを主張するのと同じように正しくない。しかしこの手順は疑いなく馬鹿げており, 彫刻を美的な教育手段として使うこと, それを意図されていない観点で使うことは実際にほとんど正しくないと思われる。すなわち, もしこの美的な発達が口先だけのスローガンにならないようにするには基礎から必要性をもって始める必要があり, まず子どもに秩序と正確さをもって各作業を行うことに慣れさせなければならない。また, そのような手段を通して何か美しいとみなされるための避けがたい条件は, 第一にそれが上手にきちんと作られるべきであり, 常に完全でなければならないこと, 不注意で作られたものはとても多くの装飾で飾られていることを子どもに植え付けなければならない。経験が明らかに示していることは, 本気で美に対する感覚を発達させたいならば, このような手順を踏まねばならないことである。飾ることが(発達の)後期の段階に属することや, 飾りは作業の最後に行うものであり, 出発点でないことを無視して早期に彫刻を始める学校での作業は質が劣るものとなり, しばしば綺麗なものではなくなる。多くの熱血漢が遂行の際に形や組み立てなどが完全に飾りのための背景になってしまうような, きちんと出来ていない作品が美的教育の役に立つと自分自身や他人にいかにも思い込ませたがる。逆に, 飾りが眼を惑わせ, だらしく組み立てられた細部から注意をそらす以外の他の目的がないように思われるような飾りが美的な本質についての完全に間違っただ概念を生徒に容易に植え付けることになるのではないだろうか? 彫刻によって, 若者が実際にあるものよりも外見(飾り)により重点を置くことに系統的に慣れさせ, 道徳の分野にある程度影響を与えるような表面的な観察方法に基礎がおかれるのではないだろうか?

彫刻に対してスロイド教育の中心的な場所を与えるという主張についてよく引用されるもう一つの理由は, 彫刻の方が木工スロイドの分野に属するものよりも家庭での仕事によりよく適用されるからであり, 学校は生活のために活動しているので, 生徒はまず学校時代あるいは学校卒業後において自分自身の手で遂行できるような作業を遂行すべきであるという理由である。この理由も表面的な価値を示したものに過ぎないことは誰でもわかることである。スロイドは教育の手段としてみたとき, 暇な時間に暇つぶしをすることに役立つというよりもはるかにより高度で, より重要な目的をもっている。これらの目的のいくつかはすでにこの論文で述べた。もし学校で家庭の仕事の促進のために, 彫刻するための板が匏台よりも家庭で見つけやすいという理由で, 彫刻を指物スロイドよりも先に教えようとするならば, そのことは学校の体操の授業で, その体操の授業は肉体の発達を本質的な目的としているが, 生徒が家庭においてはそのような器具を入手できないから, また家庭では学校で学んだ運動を遂行することができないという理由で, 器具を使う体操をやめたいということとほとんど同じである。しかし, 教育的に教育された体操の専門家がそのような理解をすることはありえない。逆

に生徒は家庭ではおそらく器具を入手できないので、その器具なしで体操をすることによる効果が期待できないので、学校は一定の練習のもとで自分たちの生徒にそのような器具を用いる機会を与えなければならない、と体操の専門家は言うはずである。同様に学校における指物スロイドの利用について同じ事情がある。この指物スロイドを行うために必要な器具や道具を確保する難しさ（その難しさは事実ではなく、見かけにすぎない）が、多くの点であまり適切ではない彫刻をすることを学校に奨励するのではなく、そのような難しさは事実というよりはむしろ見かけであり、全く正反対の考え方が正しいように思える。指物スロイドは彫刻とは異なり、子どもの発達に最もふさわしい労働の種類である。子どもたちはおそらく家庭では彫刻以外の木工スロイドに従事することはない。もし可能ならば、学校が生徒に指物スロイドを練習させたほうがよい。ちなみに、正しく行われたスロイドがどのような効果があるか、何を生み出すかについて理解している人たちは、彫刻が何か特別にもっともふさわしい家庭での作業であると見なすことを認めることができない。むしろ反対であろう。発達期にあまりにも長い間座り続けることによる有害な結果がしばしば示されてきたので、この長く座り続ける時間をできるだけ短くすることの望ましさについて意見はほとんど一致している。その場合長く座り続けたり、立ち続けたりすることで練習されるスロイドは、さらに生徒たちの視力を弱めうるスロイドは特別に有益な家庭の仕事であると実際に理由をもって主張できるであろうか？その時に生徒たちは、学校でも家庭での宿題でも十分すぎるほど座っているのではないだろうか？この問題に対する答えはただ一つしかない。

しかし、しばしばよく考えないで主張されるように、彫刻がとてつもない優れた家庭での仕事であるという仮定のもとで、学校ではまず第一に彫刻を教えるべきであり、彫刻を教えることを可能にするために重要な教育目的を無視すべきであるという結論を引き出してはいけぬ。あらゆることにはふさわしい時と場所がある。多くの女性の装飾の仕事、簡単な編み物や刺繍等は、彫刻と同じようなものである。それらは必要な前提があるときに最も簡単に最も早く学ぶことができる。学校がそれに心配する必要はない。学校は本来の任務つまり前提を与えることに自らを制限した方がいい。適切な時期になれば、あれこれの点で生活に適切な作業は容易に学ぶことができる。学校は現在の時点で子どもの発達に役に立つことを犠牲にして、将来役に立つであろうことを行わない方がいい。その日その日の大事にすることは、すべての教育的教授にとって重要な基本テーマである。そのことは、どの教科についてもあてはまる。それに加えて、もし問題の核心に近づきたいならば、学校がこの提案された家庭での仕事を学習させることで、学校が役立ちたいことで役に立つかどうかは実際のところ大変疑がわしい。提案されたきたこの家庭での仕事を必修にするならば、その疑わしさはさらにもっと大きくなる。学校の教科書や学校の活動が一般的に生徒には大事ではないこと、残念なことに生徒たちは卒業後に暇潰しにそれらを使っていることは広く豊かな経験によって十分に明らかにされてきた。もし学校が子どもたちを一定の仕事から意欲をなくさせたいならば、学校時代にできるだけ可能な限り仕事をさせることを強いるべきである。それが効果があることをかなりの信憑性をもって主張できる。

以上のことが彫刻についてのことである。要するに、ここで論じている発達段階にとって木工スロイド、特に指物スロイドは最も適切な仕事の種類であり、それゆえ学校での授業がこれまで述べた点で集中すべき仕事の種類である。『ヴェルダンディ (Verdandi)』(という雑誌)に掲載された「教育手段としてのスロイドについて (Om slojden sasom uppfostringmedel)」という論文に対する批評の中で以下のように述べられている。「のちに知的労働に従事することになる生徒が大人になった時に、子ども時代に遂行することを学んだ肉体労働を通して元気をつけたり、休息したり、身体を強くする可能性を持たせるべきである。もしスロイドがこの任務を満了することができるならば、スロイドは最も健康的な種類の革新を生み出すに違いない。しかしその場合、異なる種類のスロイドに対する生徒の多様な好みもまた考慮しなければならない。その際それが木工スロイドに限定する理由にはならないと考える。」もし、(異なる種類のスロイド)がこの任務を満了することができるならば、それが健康によいことについてこの尊敬すべき女性批評家の意見は私のものと完全に一致する。しかし以前に指摘したように、学校がスロイド教育の主要な目的を健康によいことにおくべきだとか、おくことができるという結論にはならない。さらに大人がずっと静かに座り続ける頭脳労働に対する変化を引き起こすように、その作業を通して「休息し」「身体を強くする」べきであると明確に述べるとき、それは「どんな種類の作業」をさしているのか？。確かにそれは、籠あみ、紙細工、製本、服の仕立て、靴を作ること、金細工、時計の修理や他の小さな、一面的な運動を必要とする作業ではない。鍛冶はどうか？確かに鍛冶は、疑いもなく元気をつけ、身体を強化し、もっとも健康的な作業であるが、それに対してこの種類のスロイドが特に家庭の中でできるかどうか強い疑問がある。また一般的に鍛冶の練習に必要な補助手段を家庭の中で調達できることにも強い疑問がある。さらに多様な種類のスロイドに対する生徒の多様な好みを考慮することの望ましさに関し

では、この多様な好みが存在が示されたことに対してかなりの根拠をもってあえて反論することができる。木工スロイドが正しく組織された場合、すべての当該年齢の生徒はそれに従事する大きな喜びを感じる事が、教育学的な観点から見て木工スロイドの最大の利点の一つである。少なくとも知られている限り、スウェーデンの学校や外国の学校の経験は、完全に生徒が喜んで参加していることを示している。

このテーマ「スロイド教育について」につけ加えるべきことがまだたくさんある。しかし、この論文はすでに最初の計画よりも膨れ上がっているため、ここで終える。さらに他の問題についても触れるべきであるが、スロイドであれ他の教科であれ、教育的教授に関する問題のあらゆるものの中で最も重要な問題は教師の問題であることは疑う余地はない。すでに示してきたようにほとんどすべての他の問題は教育問題に行き着き、教育問題として解決されるべきであるように、それぞれの教育システムあるいはそこから生じた方法の問題は教師の問題に行き着く。システムと方法それ自体は死んだ形式に過ぎない。教師の使命は活気ある精神をシステムと方法に吹き込むことである。最も優れた方法がよくない教師の手に渡れば、よい剣が能力のない剣士の手に渡されたのと同じようになる。異なる理解や異なる方法についての闘争において、教師の問題が無視されないように、それとともに「よい教師がいるところはよい学校になる」という諺を常に思い出すべきである。

(1886年)